

# 子どもの思考研究における発達・臨床的アプローチと対話法

田丸 敏高\*

## Clinical Approaches and Developmental Approaches to Child Psychology of Thinking

TAMARU Toshitaka\*

### はじめに

現代社会における教育・福祉・医療は協力しあいながら、さまざまな子どもたちに対し、その個別的なニーズに応えつつ、それぞれの健やかな成長を実現しようとしている。その際、心理に対する期待はますます高まっているが、そうした期待に応えるべく心理学を発展させるためには、いくつかの理論的な課題を解決しなければならない。本稿では、そうした課題の1つである「臨床的アプローチと発達のアプローチの区別と統合」を取り上げ、主として子どもの思考の問題を念頭において検討してみたい。

### 1. 心理学に対する需要とその社会的背景

この10年あまりわが国は、ソ連の崩壊に始まった冷戦体制など政治情勢の大規模な変化、世界経済の不況とバブルの崩壊、阪神淡路大震災や三宅島の噴火などの大災害に見舞われるとともに、「構造改革」に伴うリストラや失業、中高年における自殺の増加<sup>(1)</sup>に直面することになった。大人と子どもとの関係に目を向ければ、一方で虐待や子殺し、大阪教育大学附属池田小学校における殺人事件など、他方で親父狩りや校内暴力、生徒による教師殺人事件など、殺伐とした関係がマスコミの喧伝をもたらし、また子どもどうしの間でも「いじめ」が相変わらず継続し陰湿化している。不登校は13万人を越え<sup>(2)</sup>、日常化し、国際的にみても学習時間と意欲の低下および低学力が広がっている。これらに対応して、少年法の改定(2000年)、教育改革関連6法の成立(2001)は、多くの国民の認識と合意を得る間もなく、国会を通過していった。

こうした社会状況の下、解離性人格障害など精神障害を扱ったドラマや小説が流行し、カウンセラーが主人公となる機会も増えてきた。心理学が甚に流行し「癒し」ブームが形成されていった。しかし、心理学に対する社会的需要が、現代的問題を解決してくれる心理学を直ちに生み出すわけではない。事件が起こるたびに、精神病理学者や臨床心理学者の発言が新聞・テレビなどで紹介されるが、そこではひたすら子どもの内的な世界へ目を向ける傾向が作り出されやすい。問題の社会的な理解や因果関係の説明という点では弱点をもつ従来の臨床心理学<sup>(3)</sup>の傾向は助長され、内的世界の解釈やクライアントとカウンセラーという1対1の枠内での治療方法が強調されることになる。

この間、学校から企業まで、育児相談から老人介護まで、カ

ウンセリングに携わる心理士に対する需要は大幅に拡大した。しかし、その多くは臨時職員であり、他の職種との共同研究の機会はもちろんのこと心理職内部での研修の機会も乏しく、身分上も不安定な状況におかれている。子どもと直接関わる心理士は、身をすり減らすようにして各所を奔走するが、次から次へと生じる問題の対処に追われ、現実問題の大きさに悩むことになる。こうした中、大学等の研究機関には、子どもたちのデータを長期間にわたって蓄積しつつ、現実問題に立ち向かえる懐の広い理論的活動が求められるし、また心理学および関連諸科学についての正確な知識と技術、柔軟な判断力を備えた心理士を養成することが求められる。しかし、少子化のなかで「競争」を強いられる大学は、「臨床心理士」の養成を看板に掲げるのに急であり、大学本来の社会的使命を全うしているとは言い難い。こうした事態は、心理学のバランスのとれた発展も各大学の特色ある心理学のコース作りをも疎外するし、さまざまなセンスや学識をもった心理士を社会に生み出す機会を奪うことになる。

### 2. 心理的行為の存在様式と発達のアプローチ・臨床的アプローチ

発達心理学は、心理的行為を「関係と変化」という全体のなかで存在すると考える<sup>(4)</sup>。しかし、特定の心理的行為を認識するためには、ある枠組みを用いてそれを切り取り、いったん固定してみる必要がある。それが分析という作業であるが、分析した結果は再度「関係と変化」の全体の中に返さなければならない。それが総合という作業である。したがって、分析は総合を前提としているし、総合も分析を前提としていることになる。つまり、分析の結果見出される「要素element」は、総合の出発点たりえるものでなければならない。総合の結果としての全体は、分析の始まりにおいても捉えられている必要がある。

意識心理学は、こうした「要素」を内省によって把握しようとした。意識をいったん知情意というような「要素」に分け、再構成しようとした。だが、いったん孤立させられた「要素」は、そう簡単には「全体」に復帰できない。とりわけ、大人の固定観念にもとづいて恣意的に取り出された「要素」は、もともと全体へ復帰することができないのである。内省に依拠した意識心理学に対して、発達心理学は行動の事実に基づいて研究を行おうとした。発達心理学は、心理的行為を正確に測定するためにさまざまな方法を開発し、観察法、実験法、面接法、テスト法などを通じて、多くの事実を示してきた。その事実を繋ぎ合わせて概念化し、「知能」や「性格」、「思考」や「感情」、「自我」や「人格」等を明らかにしてきた。また、患者の治療を目指す臨床心理学も、心理的行為を孤立させて捉えようとする

\* 発達心理学研究室 Department of Developmental Psychology  
キーワード：子ども、心理、臨床、発達

るのではなく、むしろ正常の中に異常を、異常の中に正常を見出し、病理を身体や社会に開かれた過程として捉えようとした。そうした意味で、発達心理学と臨床心理学とはともに、心理的行為を関係と変化の全体において理解しようとする努力を行ってきたと言える。

### 3. 思考についての心理学的研究

かつて、私は「児童心理に関する学習的アプローチと発達のアプローチ」<sup>(5)</sup>において、子どもの社会認識の成長を捉える上で2つのアプローチが存在することについて言及した。そして、子どもの認識発達に対して、前者が

- (1) 科学・技術の体系
- (2) 行動形成の順序性
- (3) 領域固有性

を問題にしようとするのに対して、後者は

- (1) 活動の主体
- (2) 活動の発達段階
- (3) 関係全体

という視点をもっていることを示した。そこでは、両者の違いを強調したが、実は共通する所も大きかった。それは、子どもを進歩的にみようとしていること、子どもを行動の事実に基づいて捉えようとしていること、解釈をふくらませるのではなく、実証的な見方を重んじ検証可能な方法を求めることなどであった。

ところで、知能一般は、高い所に吊されたバナナをとろうとするチンパンジーのように、ある問題事態においてそれを解決しようとする過程で働く。しかし、人間の言語的な思考は、目前の問題解決のためというより、人に説明を求められるというような社会的な事態のなかで展開する。したがって、心理学はよく子どもに質問をすることで研究を始める。質問は、思考を引き出す。社会とは何かと問われれば、人は社会について思考し、社会的事象を他の事象から識別しようしたり、社会について定義付けたりしようとする。また、生命がどのようにして誕生したのかと問われれば、人は生命について思考し、生命を他の物質と関係づけようしたり、生命について因果的に説明しようしたりする。

こうした思考の過程を、論理として抽象することも可能である。そのとき、思考は論理学の対象となる。なぜなら、完成した思考である真理は、論理的・概念的に把握されるからである。しかし、実際の思考は、心理学の対象であり、心理学によってのみ具体的に明らかにされる。人は、社会について思考しようとするとき、その利害関係や立場によってとらえ方が変わってくるし、生命について思考しようとするとき、その宗教や環境によって態度が異なってくる。思考によって導かれるのが、科学的認識であることもあれば、文学的認識であることもある。また、思考は強い情動によって左右されるし、疲労等の生理的現象を生み出すこともある。実際の思考は、こうして種々の具体的な諸関係によって条件付けられているのである。

思考の具体的な姿を明らかにするためには、発達のにとらえることが有効である。発達のにとらえるとは、思考を関係と変化の中でみるということであり、思考が主観の中で抽象的に存在するのではなく、一方では、からだや中枢神経系に規定されていることを認め、他方では、環境や社会によって規定されていることを認めることである。それはまた、思考を概念だけに

抽象化しようとするのではなく、言語を媒介とする対話やコミュニケーションの過程の引き戻してとらえようとするのである。

### 4. 脳神経系の特徴と発達段階論

脳神経とりわけ大脳皮質は、原理的には無限の連合が可能である。どのような領域に關係して言語活動が展開するのかを考えれば、そこに無限の可能性が想定しうるのである。つまり、人間は、大脳皮質の特徴に目を向ければ、いわば無限の発達段階を作り出す可能性を持っていると言えるのである。風とは何かと問われた子どもは、風について思いめぐらし、ついには窓の外に吹いている風を発見し、回答を知覚によって示そうとするかもしれない。質問に対して、知覚的に答えようとする子どもは存在するし、大人でもそうしたことはある。また、ある障害児は知覚にあくまでも固執する。知覚的な発達段階が存在する。風について問われたとき、風の記憶をたどり、風が吹いている場面を想起し、風は雨だと回答する子どももいる。記憶に依拠して質問に答えようとするのは、想起的な段階と言える。重い木ぎれが水に浮かび、軽い十円玉が水に沈むのを見た子どもは、水に浮く理由について「重いから」と答えるかもしれない。なぜなら、その事実は彼が経験したことであり、記憶していることであるからである。さらに、風とは何かと問われて、雷様や風神を想像し、風が吹く理由を物語として展開していく子どももいる。想像に依拠し質問に答えようとするのは、物語的な段階と言えるかもしれない。コルサコフ症候群のような精神障害は作話が特徴的であるが、このことから物語的な段階の根拠として脳活動の制約が想定できる。雨が降っているときでも降ってないときでも風が吹くことがあるという事実から、雨を風の原因とすることには矛盾があることを見出したり、圧力と空気の移動の関係から気圧の変化を風の原因として考えてみるといった、論理的な思考は、ある年齢以降可能になる。一般にはそれは、「9、10歳の節」と呼ばれている。論理的に思考するためには、いくつかの次元を組み合わせる必要がある。速度は時間と距離の関係によって明らかになるが、日常生活においても、たとえば、夕食の準備をするときなど、主婦は、「安い」や「おいしい」、「栄養がある」や「安全である」、そして「手早くできる」など種々の次元を組み合わせ判断している。学生もまた、次元数は少ないかもしれないが、「安い」と「多い」等の次元を使って判断している。こうした論理的な思考は、前頭葉が成熟し、前頭連合野のもとに他の皮質連合野が結び付き、また、海馬などの大脳辺縁系とも結び付いたとき、安定したものとなっていく。論理的な段階のカテゴリ的思考こそ脳の成熟に依存していると言える。

脳においては無限の連合が可能であり、したがって、思考にも無限の発達段階が可能であるのだが、実際には、主として4つの発達段階が存在しているし、年齢に応じて継起的に出現する。

- ① 知覚的な段階
- ② 想起的な段階
- ③ 物語的な段階
- ④ 論理的な段階

## 5. 発達のアプローチと臨床的アプローチの接点としての対話法

なぜ、この4つの段階が存在しているのだろうか、それはまた年齢に応じて発達してくるのであろうか。それを説くカギは「脳にはない」。なぜなら、脳は閉じたシステムではなく、他者や社会に開かれたシステムだからである。人の脳は他者の脳と共同することによってのみ、活動できるので、子どもが取り結ぶことのできる他者関係によって、大脳皮質で連絡しあう関係も決定されていく。そうした他者関係を決定づけるのは、ヴィゴツキーのいう心理的な道具としての記号、狭義には言語である。心理的な道具は個人の外に存在するものであるが、それを心理的道具として取り入れるとき、その人個人の心理的活動に見合った道具として構成しなおされるのである。ヴィゴツキーが思考の単位を意味に見出そうとしたのは、意味付けという行為こそがまさに思考と言語が交差する地点にあると考えたからである。しかし、ヴィゴツキーはこの意味づけの活動を静的にとらえたため、サハロフの積木テストやピアジェの接続詞の研究に期待することになったのである。そして、動的な意味づけの活動は、「アンナ・カレーニナ」のような文学作品の研究において見出されていくのであった。<sup>(6)</sup>

子どもにおいて直接的に思考の研究を行ったのは、ピアジェやワロンであった。彼らは子どもに質問し、子どもの回答をありのままに研究しようとした。ピアジェは子どもの回答を認識の歴史的発達のある段階に位置づけて説明しようとした<sup>(7)</sup>。その意味では、ピアジェの臨床法は解釈の過剰を伴うことになる。ワロンは質問と回答の繰り返しである対話過程そのもののなかに子どもの思考の特徴を見出そうとした。5歳半から9歳の子どもに思考の起源を発見した<sup>(8)</sup>。

ピアジェの解釈は、フロイトの解釈とは対照的であるが、解釈を優先させるという点ではきわめて類似している。しかも、解釈の正しさをピアジェで言えば子どもの思考の発達と認識発達の歴史とによって実証しようとしているし、フロイトもヒステリー患者の治療によって検証しようとしている。そうした科学的な態度も両者に共通している。科学を拒否し、解釈のユニークさを極限にまで追求し、宗教に近い世界を作り出していったのはユングである。その意味で、ユングの臨床心理学はフロイトに淵源をもつが、フロイトのそれとは対立することになる。

ワロンは、徹底した対話過程の記述を行っているが、それはクレベリンの早発性痴呆の研究と類似している。ワロンは、インタビューアーによる質問を括弧に入れて、回答のエッセンスだけをデータとして取り出そうとはしなかった。むしろ、対話の全過程を分析の対象とした。そのため、言いよみや言い間違いはもちろん、「わからない」とする回答も考察されることになる。そして、子どもの思考は、質問者や質問の仕方によって影響されるきわめて情動的な過程であることが判明する。また、子どもの思考を論理以前と以後とに二分するのではなく、子どもの思考を積極的に特徴づけるとともにその基礎に「対による思考」を見出した。

「対」は、あらゆる経験的な出会いをもとにしているもので、必然的な関係ばかりではなく、感覚的な同時性や言語的な印象によっても形成されるし、とりわけ強い情動が存在する場合には2つの項が強力に結びつくことになる。ワロンの「対」は、ヴィゴツキーの生活的概念と類似しているし、フロイトの連

想法によって引き出される無意識の連合とも類似している、より包括的な概念である。子どもは、「対」によって多様な思考が可能になるのだが、同時に「対」によって思考が制限を受けたり、あらぬ方に思考が逸れていったりすることになる。1つのテーマに即して思考を継続させることは、子どもにとってたいへんな発達の課題なのである。そのため、子どもの思考は環境やからだの変化の影響を受けやすい。

こうした子どもの思考の脆弱さは、思考の病理を理解したり、思考の発達を支援したりする上で、貴重な知見を提供する。ここに、臨床的アプローチと発達のアプローチとの接点の典型を認めることは困難なことではない。本来、臨床心理学は発達のアプローチを必要とするし、発達心理学は臨床的アプローチを必要とするのである。

以上、古典をたどりながら両アプローチについて整理すると、両者ともに、

- ① ことばをコミュニケーションと思考の双方の道具として理解し、
- ② 個人の心理を明らかに知るためにも対話過程そのものを丁寧に記述し、
- ③ 心理活動を関係と変化の全体として捉えようとするという共通点をもつと言える。他方、臨床的アプローチは、
  - ① 対話過程から病理の現れを取り出し、
  - ② それを正常と対比し、
  - ③ 「自我」あるいは「母性」といった普遍的概念によって説明しようとするのに対し、発達のアプローチは、
    - ① 対話過程から新しい発達を取り出し、
    - ② それを以前の段階と対比し、
    - ③ 「発達期」や「発達段階」といった概念によって説明しようとすることを特徴とすると言える。

## 6. 発達心理学の方法論と課題

発達心理学は、あたかも心理学の1分科のように考えられている。それは、発達心理学が児童心理学や青年心理学などの年齢心理学を統合してきたからである。いまでは、発達心理学は胎児期から老年期までを扱う総合的な発達科学に向かって歩んでいる。しかし、心理学に発達の方法を取り入れた人々——ダーウィン、ピネー、ゲゼル、ウェルナー、フロイト、ピアジェ、ヴィゴツキー、ルリヤ、ワロン等々——は、心理学のなかに1分科を作ろうとしたのではなく、心理学を1つの科学の体系として作り出そうとしたのである。心理学を科学として形成しようとする努力は、心理学を子どもの権利の実現のために生かそうとする実践的な努力と矛盾するものではない。心理を人的内的世界だけに閉じこめる解釈が、心理学の実践を個人的な関係に閉じこめ、多くの人々との共同を妨害するのである。

最後に、発達心理学の方法論について、その基本的特徴を示しておきたい。

(1) 比較とは、科学の方法の中でも最も単純な方法の1つである。事象は他の事象と比較されることによって区別される。方法は単純であっても、それがふさわしい対象に適用されれば、その事象の本質を明らかにすることができる。その意味で、発達心理学を比較心理学と呼ぶこともできる。比較の水準の違いによって、大きく4つの心理学が区別される。

- ① ヒトの進化の過程における比較 おおよそ400万年前アフリカの地でボノボの祖先がヒトへの進化の道を辿り始めた

いう。脳の重さは現在の乳児ほどであったが、すでに2足歩行をしている。こうした進化の過程のなかで、ヒトの行動発達を考えること、とりわけチンパンジーとヒトとの比較を行うことは、人間の心理の基本的特徴を明らかにする。

② 人類の歴史の過程における比較 現代人の起源である5万年前のクロマニヨン人は脳重においては現在の人間と変わらない。しかし、言語を使い、道具を用いて、生産労働を始めた人類は、さまざまな文化を創造し、自らを変革していった。新しい心理過程である認識や感情を発達させていった。

③ 子どもから大人への成長の過程における比較 約18年を経て子どもは大人へと成長する。子どもと大人とを比較すると、脳神経系の発達に伴って種々の行動発達が生じているのがわかる。また、言語の習得によって心理諸過程に著しい変化を引き起こす。さらに、子どもは教育を受け学習することによって、新しい心理機能を成熟させる。

④ 精神病理の過程における比較 「正常は異常の中に明らかになる」と言われるように、異常は特定の心理機能の本来の姿を暴露する。言語によって方向づけられない情動機能が単独でどのような発達過程を辿るかは障害児の発達において明らかにされる。あるいは、精神分裂病の患者が辿る退行過程を、つまりもっとも高次の心理過程である人格が崩壊し、やがて痴呆化が進む過程を、逆に辿ることによって心理諸機能の発達の様子が明らかにされる。

(2) 年齢は、それぞれ固有の意義を持っている。胎児、乳児、幼児、児童、青年、壮年、中年、老年はそれぞれ特徴的な心理活動によって区分できる。こうした年齢に応じた心理を明らかにするのが年齢心理学である。年齢心理学は、幼児心理学や児童心理学、青年心理学等とも呼ばれ、たとえば、教職の必須科目としても位置づけられてきた。また、最近研究のめざましい老年心理学の知見は老人医療や老人介護において重要な役割を果たしている。こうした年齢心理学は、内観の言語報告に頼るような意識心理学を変革し、観察・実験などの客観的な方法を発展させた。と同時に、発達期、発達段階、発達の危機などのような発達心理学の基本的な概念を生み出していった。

(3) 基礎と応用は、しばしば対立する概念であるが、心理学の場合、応用から切り離された基礎の発展は成り立たなかった。医療や教育、福祉、産業などに応用されることによって、一般心理学も発展することができた。そうした意味で、発達心理学は応用心理学であると同時に基礎心理学である。発達心理学は、発達の診断や子育て・教育の技術に関わると同時に、子ども観や子どもの権利、さらに人間観や人権思想にも関わる問題を提起する。そのことは、ゲゼルやワロン、ピアジェたち発達心理学の巨匠たちの生き方自身が示している。

このように考えてみると、発達心理学は他の心理学ならびに関連諸科学と共同して、子どもの臨床に関わることのできる開かれた科学へと発展していく必要と責任に迫られていると言える。

#### 注

- (1) 年間の自殺者は、3万人を越えている。
- (2) 2000年度間の「不登校」を理由とする30日以上欠席者は小学校2万6千人、中学校10万8千人、合計13万4千人(文部科学省生涯学習政策局調査企画課による平成13年度学校基本調査速報)
- (3) 臨床心理学とは何か。1896年L. Witmerによるペンシル

バニア大学での心理学クリニックの創設が端緒といわれている。1935年アメリカ心理学会の定義によれば、「臨床心理学は応用心理学の一形式で、測定・分析及び観察を方法として、個人の行動能力と、行動の性格とを明確にしようとするものであり、さらに、それらの方法によって見出されたものを、身体的所見や社会生活史についてえられた資料と総合した上で、その個人の妥当な適応に対し、指示と勧告を与えるものである。」(新・教育心理学事典)とされている。

わが国においては、1964年に日本臨床心理学会が設立総会を行い、1969年に社会との関わりにおいて論争が起こり、その後分裂のなか、1982年日本心理臨床学会が設立されるに至った。それは、「心理臨床の業務にたずさわるもの相互の連携協力によって心理臨床科学の進歩と、会員の資質向上、身分の安定をはかる」ことを目的として掲げ、平成13年2月12日現在の会員数は、正会員8,117名、準会員2,775名の計10,892名であり、日本の心理学界では最大の会員数を持つ学会となっている。設立時以来、河合隼雄氏とその背景のユング理論が大きな影響力を持っていることが特徴的である。

- (4) アンリ・ワロン 竹内良知訳 子どもの精神的発達 人文書院 1982 7~11ページ
- (5) 田丸敏高 児童心理に関する学習的アプローチと発達のアプローチ 教育実践研究指導センター年報創刊号 1992
- (6) ヴィゴツキー 柴田義松訳 思考と言語 明治図書 1962
- (7) ピアジェ 岸田秀訳 子どもの因果関係の認識 明治図書 1971
- (8) ワロン 滝沢武久・岸田秀訳 子どもの思考の起源 明治図書 1968

#### 付記

本稿の問題意識は、教育実践総合センター・プロジェクト研究として立ち上げた「鳥取県における臨床心理と発達心理の実践的統合に関する研究」(代表 田丸敏高)に端を発している。今年度は、共同研究者が中心となり、月2回の割合で研究会を行い、ワロンの発達論について検討しながら、子どもに関わる異なる職種間の交流をしてきた。研究会でいろいろな資料や意見を提供してくださった方々に感謝します。